

Business

● ビジネスリスクマネジメント

October 2008

10

Risk Management

第1特集

ミドルマネジャーのための 経営戦略入門

第2特集

話し上手なマネジャーになるための NLP会話術

新連載

コミュニケーション・リスクマネジメント
ミドルマネジャーの対話力

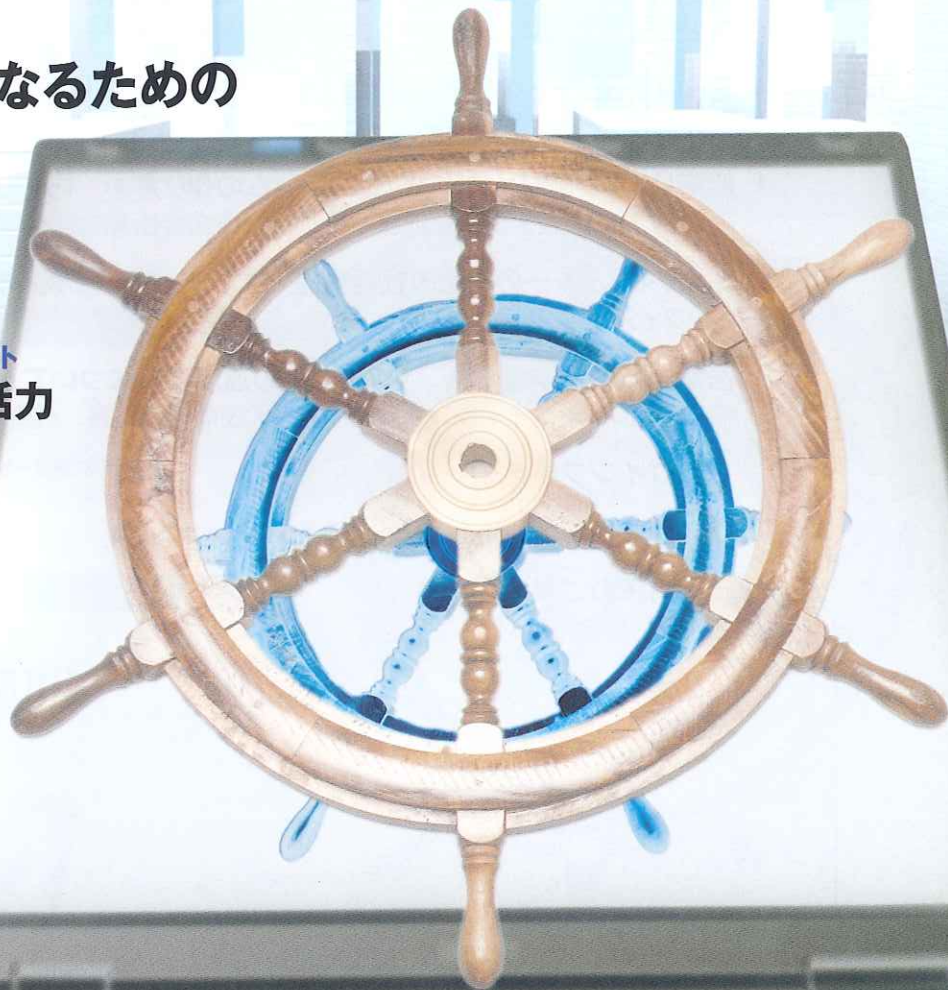
【好評連載】

ミドルマネジャーのための法律講座
これだけは知っておきたい!
パート・アルバイト雇用の法律知識

組織リスクマネジメント

「創造的チーム」の作り方

ミドルマネジャーのための教養講座
エドワード・デ・ボノの水平思考



Q&A

持続点滴の速度遅れについて



最近、私が勤務している病院では、点滴についてのヒヤリハット分析を行なっています。先日、持続点滴の速度遅れを取り戻そうとした看護師が落下速度を速めたところ、かなり予定より早く投与してしまい、ヒヤリハット報告としてあがってきました。このような場合は、どのように対応すべきでしょうか。



持続点滴の速度変化は、患者様の病態や薬剤の種類などによっては大きな事故に発展しうるので、注意が必要です。医療機関の報告書を読むと、「輸液ポンプの調整時に落下速度の設定確認を徹底する」といった対策の多いのが目立ちます。

セッティングの段階以外にもリスクは考えられますから、ヒヤリハットの段階で分析し、重大な事態をまねかないようにすることが大切です。持続点滴の速度について、留意すべき点を右表のようにまとめてみました。

①と②については、点滴の目的によって輸液の内容が異なることは当然ですから、予定していた点滴速度に変化が生じた場合、患者様にどのような負担が生じるかを考えることが重要となります。

仮に薬剤が混注されていない場合でも、輸液製剤によっては患者様の心機能や腎機能に負荷がかかる可能性があります。患者様の病態から考えて、点滴による病状の変化が想定されるかどうかを見極めてから、速度について変更を検討したいものです。

③については現場での判断が必要となります。たとえば、寝返りなどにより患者様が点滴ラインを圧迫してしまい、滴下速度を遅くしてしまうことなどが 있습니다。

この他、点滴ラインが曲がっていた、

留置針が抜けかかっていた、など点滴速度遅れの要因をその場で確認しなくてはなりません。体位や肢位の変更などで対応が可能なのもありますから、慌てて速度をあげる前に、速度が落ちた原因を考える必要があります。

④については、点滴に限ったことではありませんが、異常を発見し、その原因が不明確で患者様のリスクも大きい場合には、独断は避けなくてはなりません。点滴のように、現場での判断が日常的に行なわれる処置の場合には、単独で判断しがちなので注意が必要です。

このように、点滴の速度変化といった日常的な医療行為の中にもリスクは存在します。安易な判断を避けるためにも、起こりうる事態を想定した分析を行ない、その結果を共有しておく必要があります。

大きな事故となる前に、ヒヤリハットの事例を活かしたいものです。

①	点滴の目的は何か？
②	患者様の病態から想定したリスクは何か？
③	点滴速度の変化要因は何か？
④	単独で判断をしない

PROFILE

株式会社フォーサイトコンサルティング/代表取締役社長

浅野 睦 Makoto Asano

丸井・ブルデンシャル生命を経て、コンサルタントとして独立。業務改革、営業戦略、リスクマネジメントを中心に、一般企業から医療法人など、幅広くコンサルティング活動を展開。リスクマネジメント協会理事。近著に『変革期の介護ビジネス』（学陽書房）

